

サブプロ (b) 「官民連携による超高密度地震動観測データの収集・整備」  
青井 真 (サブプロ (b) 研究統括/防災科学技術研究所地震津波火山ネットワークセンター センター長)



青井氏は、全国規模の地震観測網に加え、首都圏において約 300 観測点からなる MeSO-net という観測網を運用していることを紹介しました。その上で、観測地点数がまだ十分ではないかという課題を指摘し、その解決の 1 つの方策として、従来のデータと民間のデータを統合して活用していくことが重要であることを述べました。

具体的には、防災科学技術研究所が全国 2000 カ所をこえる観測地点を設置する MOWLAS (陸海統合地震津波火山観測網) や MeSO-net に加え、民間企業である東京ガスが独自に整備している地震観測網 SUPREME や、スマホアプリ「i地震」のデータなどを統合化する取り組みを説明。「MeSO-net の観測点は JR 山手線の内側に 6 個しかないのに対し、SUPREME の観測点は 90 点以上。つまり 15 倍以上の観測点が山手線の中にあり、観測点間隔が従来の約 4 分の 1 になります。MOWLAS と MeSO-net のデータに SUPREME のデータを加えると、劇的と言っていいほど稠密に地震動が分かるようになる」と青井氏は話しました。

青井氏はまた、スマートフォンによる揺れの観測技術の開発も行っていることも紹介しました。多くのスマートフォンには加速度計が中に入っており、さらにデータ送信機能とバッテリーも備えていることから「非常に優れた地震計として

の機能を潜在的に持っている。センサーの性能自体は専用の地震計に比べると若干劣るが、震度 1.5 以上であれば概ねいい値が取れることも既に分かかってきており、専用のアプリを開発することでスマートフォンが地震計として機能するようにした」と説明しました。

(2) a. マルチデータインテグレーションシステムに関する技術開発

■ 官に加えて民のデータを統合管理するシステムの開発 H30計画

➡ MeSO-netやSUPREMEデータの各種補正システム、データ統合蓄積システムの開発中。首都圏版強震モニタの高度化中。 進捗

